

ことを繰り返し返していた。師団は敵に再包囲されていることをひしひしと感じていた。

衡陽の敵陣の周りには、梯子を二つ縛らないと登り降り出来ないぐらいの深い壕が何十か掘ってある。それに鹿岩（バリケード）と地雷です。だから進めせんわ。

壕と簡単にいうけれど、今言ったように二つの梯子ぐらゐの深さだから。その壕が八月八日になるまで敵と味方の死骸で埋めてしまっている。だから壕を越えるには腐った死骸の上を行く。うつむいて行けば死骸の腐敗した液がプシュプシュとかかる。姿勢を高くすれば敵から撃たれる。

八月、いよいよ最後の時が来た。黒瀬連隊長は飛行機も来てくれない、八月六日の連隊命令には「八月六日午前五時を期して、余は連隊旗を自ら捧持して玉碎する。各隊は戦時名簿、馬匹名簿すべて焼却せよ」とある。えらいこっちゃ、全員悲痛な気持ちでその命令を聞いた。

私は命令受領から帰って日が暮れたら。「連隊長殿、岳屏高地に白旗が上がっています」と報告があった。連隊長は涙を流し、男泣き、私らも嬉しかった。岳屏高地

は一番最後まで抵抗していた。ここが白旗をかかげた。他はまだ市街でやっている。命令がゆき渡らないのだ。昼日中になって降伏命令がゆき渡って、我々は街に入った。八月八日、正式に降服の調印をした。

野戦病院

沖縄県 大川 トヨ

昭和二十年一月二十五日、軍から四年生全員、郷土を守るため疎開せずに看護教育を受け、看護隊員として協力するように校長からの伝達があり、わたしたちは、女性でも国のために役立つならと喜んで参加に同意したのである。

看護教育は校内で講義、包帯の巻き方、三角布の使用法、運動場で担架運びなどと学習することがいっぱいあった。

三月六日頃、飯塚少尉に引率され四年生は首里市赤田の山城医院跡の民家で本格的な看護教育の合宿をやり、

日課は衛生兵や看護婦と変わること無く不寝番などもやった。

引率の金城直吉教諭、石川由紀教諭とともに過ごしたのも束の間で、空襲がひどくなったので三月二十三日、通称ナゲーラ壕（南風原村新川）に入ったが、大空襲で一步も外へ出られない状態になってしまった。

わたしたちが配属された部隊は六十二師団野戦病院石五三二五部隊で係は萩原中尉だった。後日、勤務部署の組織を調べた結果、次表の通りである。

石五三二五部隊

病院長	一人
軍医	一二人
薬剤将校	二人
主計将校	一人
衛生将校	一人
准尉将校	一人
衛生下士官	四〇人
衛生兵	二〇〇人
歩兵	九九人

篤志看護婦
学徒看護婦

二〇人
七八人

四年生はすでに県外に疎開した人が多かったので学徒隊として参加したのは六一人で学徒七八人の中一七人は昭和女学校の四年生になっており生死を共にした仲間である。

学徒隊の勤務の種類

手術の手伝い ローソク持ち

軍医の汗ふき

切断された手足の処理

看護の内容

飯あげ

尿の処理

包帯交換の手伝い

死体処理は壕外の広場に埋葬

飯上げは壕から出て受け取る

水のみは民家の井戸を利用

勤務の状況

場所

ナゲーラ本部隊

首里高女の壕

ハゴ一陣地

浦添(仲間、安波茶の壕)

識名の壕、武富の壕、阿波根の壕、

保栄茂の壕、米須の壕、伊原の壕

死体処理、水のみは朝夕の攻撃が中

止している時間にやった。

交代状況

四月までは一日三交代、五月以降は

危険度

二十四時間勤務で交代なし。
壕外に出たら砲弾の雨壕の入り口で
も度々負傷者が続出。

わたしはナゲ一ラ壕で最初に配属されたのは内科で結核、伝染病の病棟で飯上げ以外はわりと楽であったが、戦闘は激化し、負傷兵が続々と送り込まれるようになったので、毎晩ぬかるみの坂路で担架運びが日課になっていた。

負傷兵は壕内に収容できず入り口付近、道路にも重なるようにして寝かされ、その頭上に砲弾が落下して一瞬のうちに多数の負傷兵が散華した時は悲惨であった。

四月十二日、中頭出身者は中部の地勢に詳しいという

ことで、わたしも浦添の安波茶に配置された。第一線に近いので負傷兵はどんどん送り込まれ、毎日、手術の手伝いがあり、切断する手足を支えながら貧血をおこし倒れたりした。

富山正道軍医は「鬼手仏心の精神で手術をするのだ」と、私たちを叱咤激励なされたので、次第に手術の手伝いも落ち着いてできるようになった。

重傷患者は専任の看護婦が世話することが多く、私は、耳たぶ、口や舌、顎を砲弾にやられた負傷兵のかかりになった。

口内は、ぐしゃぐしゃになっており、話すこともできず、うつろな眼で静かに寝ている様は気の毒でたまらなかった。

食事の世話のときは、ピンセットで口内の整理、細かいゴム管入れなど二人がかりでやった。流動食を注入しているとき、「今日のパインの汁は甘い」「ありがとう」と簡単な意思表示を私の左腕に書くようになったときの嬉しさは忘れることはできない。

比嘉ツルさんの係は、背骨の下から数えて三番から五

番の間の負傷だったが、尿は全然でない、排便はたれ流しの状態であった。時間が経つにつれて、腹がぱんぱんに脹れるので、「比嘉さんと呼んでくれ」と、泣きわめくときはわたしも手伝いしたが、細かいゴム管を入れ注射器で尿を抽出すると血尿ばかりであった。

四月二十三日の晩、患者収容をするため、安波茶の壕を出て行き、その際砲弾の破片で真栄城信子さんが負傷した。壕内で看護している者はそれを聞き涙を流すばかり・・・

負傷兵は大勢見てきましたが同僚が負傷したのは最初でした。信子さんは左の腰骨をやられ、モンペのポケットから粉々になったガラスと、ピンクのセルロイドの枠が残っていたので小さな鏡だとわかった。信子さんは壕内に運ばれ軍医の手当を受けていたが、「お母さんは神様だのなんで助けないね」と大きな声で泣き叫んでいましたが、とうとう、その晩、友達に看取られながら亡くなった。

安波茶ではその後、患者収容は殆ど防衛隊になったが、水汲みは必要上、急須一杯の水を命がけて汲んできたり

した。

洗面器に水をいれ、洗顔、身体ふき、汚れた最後の水で衣類を洗濯して着けた。暗く血生臭い壕の中でも若さがあったので夕闇迫るころ、轟音がしばらく休止する時間帯には壕外に出て新しい空気をいっぱい吸った。

海を眺めると、米軍の物量に圧倒された。軍艦、病院船が隙間のないぐらい浮かんでいる。

負傷兵が持ってきた腕時計、携帯食糧など珍しい品物ばかりだったので、この調子では沖繩は大丈夫かと話し合いながら壕内に入って勤務に着いた。

四月二十四日の夕刻、安波茶の野戦病院から砲弾を避けながら首里のナゲーラ本部壕へと急いだ。頭上で照明弾が炸裂したかと思うとすぐ砲弾の雨が降り、不気味な音を聞きながらやっと本部に着いた。

四月二十八日、学校の創立記念日だったので皆うきうきしていたが、首里高女の壕内で石川由紀先生が肌シャツ用に裁断したのを配布されたときは嬉しかった。布は針などをかりて早急に仕上げ着けた。

首里高女の壕は第一線から遠いせい手術は少なく安

波茶より静かだった。五月二十七日、海軍記念日だから友軍機が飛来するかと頼みにしていたが希望を絶たれ、二、三日後に識名の壕へと移動し、すぐ患者の付き添いで武富へと患者移送を二回やった。

二回目のときに三時間で行ける路を十二時間も砲弾の中をさまよひ、武富に到着したら壕内に入れないぐらい患者が多いのでびっくりした。

識名や武富到着後は、軽傷患者は単独行動を許し、南部後退を勤め、生存見込みのない患者は衛生兵が処置したので患者の数が減少していった。

六月一日の晩、米須小学校の校庭に着き、濡れた衣服や身体を焚火で乾かし、米須、伊原の壕生活に入った。

艦砲弾、榴霰弾、火焰砲などで南部に着いてから戦死者が多数になり心細い毎日であった。

六月二十三日午前、米須小学校前方の壕の入り口は火焰砲でやられ、大きな石が中央部に流れ、ものすごい勢いで燃えつづけ、片方の壕の入り口は米軍が銃で撃って燃えつづけている最中に、石川由紀先生に励まされ同級生一九人は「水が欲しい」と口々に言いながら井戸に向

かってふらふらと歩いている途中に捕虜になった。

同年兵の語る独立山砲第五一大隊

竹市 松義

長崎県（発言順）

山口 満

佐々木 政男

（竹市）

私は大正十一年十一月十九日生れで、三人共昭和十七年徴集です。十八年二月十日に、広島以西練兵場に集合して、軍服から帯剣、雑囊を支給され、市内の兼金旅館で一週間程滞在しました。

戦地へは、下関から釜山まで船で、朝鮮、満州經由で山海関通過が二月十九日でした。

天津―浦口と貨車輸送ですが、どの車両も満杯です。

私は飯あげ（飯、菜、汁等食事の分配を受けに炊事へ行くこと）の時に勘定したのですが、機関車三両、車両七〇でした。補充要員が歩、砲、工……と各料の者で（全